

9 松竹物語絵巻

一卷

紙本着色 江戸時代(十七〜十八世紀)
縦三・四
長一〇四四七

御伽草子系の物語の一つ。『鶴亀松竹物語』という作品の下巻にあたり、独立した一つの物語として作品化されることも多かった。物語としては、室町時代の成立かと考えられている。

日向の国、岩根山の麓に老夫婦が住んでいたが、この二人はすでに千年もの齢を重ねているのに、三十歳ばかりの姿であった。この噂が都の天皇にまで聞こえ、天皇は勅使を差し向けて、この夫婦を召した。そして何故そのようなに若いままで年を重ねて行けるのかと尋ねたところ、夫婦は毎日岩根山に生い茂るくさという草を踏み締め、山に湧き出る清水を飲んでいるからでしょうと答えた。そこで天皇はそこに都を移そうと、夫婦を返して御殿の造営を命じた。天皇は難波の港より臣下を引き連れて船で日向に向かう。その途々では神楽を奉納して、旅の無事を祈った。無事に日向の港に到着して岩根山の麓に造営された御殿に入った天皇は、山に湧き出る清水を朝夕飲んだ。すると四十代の天皇は二十代の姿へと若返る。天皇は大層喜んで夫婦に褒美を言うが、夫婦は自分たちは本来は人と交わってはいけない仙人であるから、暇が欲しいと言ひ、黒雲に乗って去っていった。そこで天皇は社を建てて二人を祀った。年月を経て、天皇がここに神楽を奉納した折、地が震えて社殿の前に松と竹が生えた。この松と竹はめでたいものと、末長く祀られたという。

この話を本絵巻は詞六段、絵五段で構成している。しかし、すでに周知のこの物語の内容と、本絵巻の内容を比較した場合、大略は同様であるが、特に詞第三〜五段の天皇が船で日向に向かう部分、岩根山御殿での天皇と夫婦についての記述などかなりの加飾があると考えられ、この点からも制作年代の下降は否めない。絵巻自身、仕立ての様子や画風、詞書の下絵などから考えても類型化が始まって以後のものと考えられ、十七世紀末、十八世紀に入る頃の作品かと考えられる。



帝、神楽を奏しながら日向に向かう 第3段

10 長恨歌絵巻

三巻

紙本着色 江戸時代(十七〜十八世紀)
縦三・二・三・三
長七八二・五〜一二七六

絵巻題簽に「長恨哥 上(中・下)」とある。この「長恨歌」は、中国・唐時代の第六代皇帝・玄宗(六八五〜七六二)と楊貴妃(七一九〜七五六)について、詩人・白居易(白居易、七七二〜八四六)が作った詩にもとづく物語である。この長恨歌は、白楽天の生存中に日本に伝わり、文学を中心に大きな影響を与えた。特に『源氏物語』の桐壺の巻に「長恨歌の御絵亭子院にかせ給ひて」と登場することを考えれば、その絵画化はかなり早い時期であったことが推察される。

「長恨歌絵巻」の遺品では、アイルランドのチェスター・ビューティー・ライブラリー所蔵の「長恨歌絵巻」(狩野山雪(一五九〇〜一六五二)筆)が優品として良く知られるほか、奈良絵本や絵巻の遺品もあるが、古い時代の作品は残っていない。

本作品は、前半は玄宗皇帝が楊貴妃を溺愛した様子、そして安祿山の乱で楊貴妃は殺され、皇帝は嘆き悲しむという通常の展開である。そして後半は、皇帝は方士仙人に楊貴妃の魂魄はいずこか尋ねさせ、仙人は蓬萊山に居る楊貴妃に逢い、簪を持ち帰って皇帝に渡して、この物語は締め括られる。絵場面の始めに、長恨歌にまつわる図様として屏風などにも取り入れられた玄宗皇帝と楊貴妃の横笛図があることや、寛文三年(一六六三)刊の浄瑠璃「楊貴妃物語」などの話と類似性があることなどから考えて、近世以降に流布した内容によって絵巻化されたものと考えられる。詞書の文字や料紙装飾、描写は類型化が始まって以後のものであり、十七世紀末から十八世紀初め頃の制作と考えられる。

- ・各展覧会図録中，作品名や作者，制作年などの表記は，図録発行当時のものです。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録の著作権はすべて宮内庁に属し，本ファイルを改変，再配布するなどの行為は有償・無償を問わずできません。
- ・三の丸尚蔵館の展覧会図録（PDF ファイル）に掲載された文章や図版を利用する場合は，書籍と同様に出典を明記してください。また，図版を出版・放送・ウェブサイト・研究資料などに使用する場合は，宮内庁ホームページに記載している「三の丸尚蔵館収蔵作品等の写真使用について」のとおり手続きを行ってください。なお，図版を営利目的の販売品や広告，また個人的な目的等で使用することはできません。

近世絵巻の興起―物語り絵の諸相

三の丸尚蔵館展覧会図録 No. 16

編集 宮内庁三の丸尚蔵館

制作 大塚巧藝社

翻訳 鶴岡厚生

発行 宮内庁

平成九年七月五日発行

© 1997, Museum of the Imperial Collections